176 胃癌・大腸癌切除例における ^{125}I 標識抗ＣＥＡ抗体集積

小野 慈、 朝倉浩一、大竹英二、松井謙吾、
（横市大・放）大橋昭、西山潔（横市大・２外）

標識抗体を用いる腫瘍の検出はすでに臨床応用が報告されているが、腫瘍集積度、バックグラウンド処理等改良すべき点が残されている。今回、西・平井の方法により得られた抗ＣＥＡ抗体に ^{125}I を標識し、切除された手術標本における抗ＣＥＡ抗体の病巣部、正常組織の集積を測定したので報告する。

^{125}I 標識抗ＣＥＡ抗体 30μCi～50μCi～150μCi を手術24～48時間前静注し、主病巣、リンパ節の他近接する正常と思われる胃、大腸、生検のための肝等の組織をウエルタイプシンチレーションカウンターにて測定し、単位重量当りのカウントを算出し、手術時採取した血液のカウントとの比を求めた。検討対象は胃癌９例、大腸癌17例であった。

癌病巣と近接する正常粘膜のカウント比は、胃癌3.04±1.80、大腸癌 3.40±1.41であった。癌病巣と血液とのカウント比は、胃癌 1.89±0.63 大腸癌 1.92±1.59であった。血中ＣＥＡ濃度と腫瘍集積との関係も検討する。

177 Ｉ－１３１標識抗ＣＥＡ抗体による腫よう陽性スキャンの経験

伊藤和夫，古舘正従，入江五朗（北大 放）秦 温信，内野純一，葛西洋一（北大一外）西 信三（山梨医大 生化）

Ｉ－１３１標識抗ＣＥＡ抗体を用いた免疫学的悪性腫よう陽性描画スキャンの臨床経験について報告する。

［材料及び方法］ 抗ＣＥＡ抗体は，直腸癌の肝転移巣より精製したＣＥＡで免疫した馬ＩｇＧで，Ｉ－１３１標識は第一ＲＩ研究所に依頼した。クロラミンＴ法による標識率は９６．８％で比放射能は２３μＣｉ／μｇであった。対象例はいずれも手術不能な進行癌で，大腸癌２例，肝癌２例，スイ頭癌１例である。投与量は７６０μＣｉ（３３μｇ ｏｆ ＩｇＧ）で，スキャンはγ－カメラ（ZS４１０Ｓ）を用い投与後３０分，１日，２日，３日，６日及び９日目に施行した。腫よう集積像の程度は（－），（＋），（＋＋）の３段階で評価した。

［結果及び結語］ Ｉ－１３１抗ＣＥＡ抗体の血中消失は二相性を示し，速い第一相は１１．０±／６（ＳＥ）時間で，遅い第二相は４．０±０．４日であった。腫よう集積像は５例中５で示された。しかし，集積程度は（＋＋）の症例はなく，腫ようの部分的描画や時間的集積程度の変化が観察された。抗ＣＥＡ抗体による免疫学的腫よう陽性スキャンの臨床的有用性を方向づける結果が示された。しかし，画質や集積率（Ｔａｒｇｅｔ／Ｎｏｎ－ｔａｒｇｅｔ）は満足のいく結果ではなかった。

---

178 乳腺悪性腫瘍における ^{201}Tl-chloride シンチグラフィ

千賀 脩，花村 直，寺井直樹，小池綏男，
飯田 太（信大 ２外），矢野今朝人，
平野浩志，滝沢正臣（信大 中放）

^{201}Tl-chloride（^{201}Tl）が種々の悪性腫瘍に集積されることが報告されているが，今回，乳腺悪性腫瘍に対して ^{201}Tl シンチグラフィを施行し検討した。また，^{201}Tl の腫瘍への集積能を周囲組織と比較する目的で，手術時採取した組織中の ^{201}Tl の放射能をシンチレーションカウンターにて計測した。対象は昭和57年10月より58年４月までの初発乳癌11例，再発乳癌３例，葉状嚢胞肉腫２例の計16例であり，いずれも手術により組織診断は確定している。初発乳癌11例中６例（54.5％），再発乳癌３例中全例（100％），葉状嚢胞肉腫２例中１例（50％）に ^{201}Tl シンチで陽性像を示した。癌組織への集積率は癌／正常乳腺比は5.3，癌／大胸筋比は3.4，癌／血液比は20.4 であった。初発乳癌への集積は必ずしも満足出来る成績ではなかったが，これは腫瘍の組織型の差よりむしろ腫瘍の大きさに一致した。一方，再発乳癌症例での集積は良好で，腫瘍の広がりを推測するのに有効であり，３例中２例に外科的切除可能であった。また，他の１例は化学療法の効果判定に有効であった。以上の成績から，^{201}Tl シンチグラフィは，乳腺悪性腫瘍の補助診断法の１つとして試みる価値があると判断した。

179 縦隔腫瘍における ^{67}Ga，^{201}Tl シンチグラフィの評価

吉村 広，田口正人，島袋国定，城野和雄，坂田博道，中條政敬，篠原慎治（鹿大 放）

胸部Ｘ線検査で縦隔腫瘍が疑われてGaシンチを施行し，その後確定診断の得られた74例（悪性リンパ腫14例を含む悪性病変20例，良性奇形腫９例を含む良性病変26例，胸腺腫28例）についてGaの集積程度と陽性率を検討し，Tlシンチとも比較したので報告する。Ga(++)の高度集積例は良性病変には見られなかった。Gaの集積陽性率は，悪性病変85％（17／20），良性病変4％（1／26）で，集積の有無による良，悪性の正診率は91％（42／46）であった。胸腺腫に対するGaの集積陽性率は71％（20／28）で，臨床病期別にみると，stage Ⅰ 14％（1／7），stage Ⅱ 60％（3／5），stage Ⅲ 100％（16／16）であった。腫瘍径とGaの集積陽性率をみると，前後径が大きいほど stage の進んだ例が多く，かつ陽性率が高い傾向にあった。同時期にTlシンチを併用した23例についてGaとTlの腫瘍描出能を比較すると，TlはGaにくらべて悪性病変や胸腺腫の描出にすぐれていた。さらに，Tlの集積程度を三段階に分けて，血管造影における vascularity・stain の程度,CTにおける contrast enhancement 前後のCE効果との関連についても検討を加えた。

Presented by Medical*Online